

『研究におけるフィールド調査の重要性』に関する 多分野横断型研究

葉山 茂¹
白石 壮一郎¹
近藤 史¹
新永 悠人¹
松井 歩¹
高島 克史¹
林 彦櫻¹
佐々木 あすか¹
諏訪 淳一郎²

はじめに

新型コロナウイルス (covid19) の感染拡大を受けて、研究プロセスとしてのフィールドワークは重要性を改めて問われている。とくに新型コロナ禍の対策として行なわれたオンラインツールを活用したフィールドワークの成功例などが蓄積されるにつれ、インフォーマントと現場で対面するフィールドワークの必要性は薄れていくようにもみえる。こうした状況のなかで、なぜ人文学の研究プロセスで対面によるフィールドワークが必要なかを再検討し、意義を明示することが必要になっている。本プロジェクトはフィールドワークという研究手法の必要性を人類学や民俗学、人文地理学、社会学、日本語学、美術史、経営学の多分野からの知見を総合して検討、共有することをめざすものである。

1 背景と目的

弘前大学人文社会科学部には人や物質を調査対象とし、現地に赴くフィールドワークを主要な手法とする領域が民俗学・人類学・人文地理学・社会学・日本語学・美術史・経営学など、多岐にわたる分野に存在している。これらの学問領域はそれぞれの目的に基づいて農山漁村や企業、商店、個人などを対象にフィールドワークを実施し、個別のディシプリンのもとで議論をしている。

一方で、ここ数年、covid19 の感染拡大により、フィールドワークを実施することが困難な状況が続き、対応として対面や参与観察を伴わないオンラインツールを用いた言葉のやりとりによる調査が次善策として行われるようになった。卒業研究の調査指導では、全国的にオンライン調査が推奨される傾向すらある。現場での具体的な経験をともなうフィールドワークでこそできることが、いまふたたび問われている。

この学術的状况に応じて、対面や参与観察などの経験を伴い、現場に立ち会うことを重視するフィールドワークの必要性について、改めて論理的な枠組みを構築することが本研究のねらいである。本研究は一義的には研究プロジェクトであり、各分野の調査者どうしの討論を通じて改めてフィールドワークの重要

¹ 弘前大学人文社会科学部

² 弘前大学国際連携本部

性と方法論とを人文社会科学の学術的な枠組みの中で明らかにすることを目的とする。

こうした学術的な検討は、大学の教育の場に十分に還元されることが見込まれる。学生に論理的にフィールドの重要性を伝える教科書の作成の基礎作りをするとともに、covid19後のフィールドサイエンスの重要性を社会的に共有することをめざす。

本研究がめざすのはフィールドワーク自体の実践ではない。フィールドワークという行為を通して得られる知見を検討し、人文社会科学の諸研究分野がフィールドを重視する理由を共有し、方法論に関する学術的な枠組みを構築・再認識することがねらいである。

2 実施内容

本プロジェクトはフィールドワークに関する研究会の実施と、フィールドワークの成果を展示として可視化することの2点をめざす成果としてきた。そこで、以下ではこの1年間の取り組みを研究会開催と弘前大学資料館第31回企画展の2つの点から報告する。

(1) 研究会の実施によるフィールドワークの現状と課題の共有

①第1回研究会の成果

本プロジェクトを実施するにあたって、第1回の研究会では葉山茂がフィールドワークをめぐる現状とその課題に関して、博物館民俗学的な立場から問題提起と課題の共有を行った。葉山の報告の趣旨は下記の通りである。

人類学や民俗学が重視するフィールドワークのプロセスでは、語りや説明に表われる情報の取得とともに、経験的に対象社会の文脈を理解するプロセスが重視される。ところが現状では後者よりも前者の情報取得に重点を置くことが多くなっている。

情報収集を目的としたフィールドワークは言語操作が中心になりやすく、聞き取り内容が抽象的になったり、感情的になったりすることが多い。この問題に対して、かつては論理的な必要性を説くよりも、むしろ体験的・体得的に現場を経験しフィールドの意味を体得することで対処してきた。学生はフィールドワークに行く意味を考える間もなく、フィールドに立ち、自ら困難を解決しながら調査スタイルを身に付け、調査と研究会における指導を繰り返すことで、フィールドワークの必要性を体得してきた。

かつてのような体得的なフィールドワークに対する理解は決して否定されるべきものではない。一方で現状、各研究者はフィールドワークに基づく研究成果を論考として提示しているものの、研究プロセスとしてのフィールドワークの必要性に十分に言及できていないとも言えない。そこで、改めて体得的に対象理解をめざすフィールドワークという研究プロセスの必要性を再検討し、言明する必要がある。

葉山が担当する博物館学では、博物館を実物教育の場、身体的経験の場と位置付けている。ここ数年の議論のなかで博物館は問題解決の場となるべく変化を遂げつつあり、博物館が持つ調査研究、収集保存、公開教育という3つの機能のあらゆる場面において、市民参加を想定するようになりつつある。市民参加の博物館はパブリックヒストリーに代表されるように、研究者と市民の双方がフィールドワークの参加者として継続的に各々の経験を突き合わせ相互交渉して合意を形成するアクション・リサーチのプロセスを重視する。このような博物館的なフィールドとの相互交渉のプロセスは、フィールドワークの必要性を検討する上でヒントになる。

第1回の研究会では上記のような問題提起をした上で、人類学・博物館民俗学的な観点からは、身体的な経験を伴うフィールドワークが欠かせないことを確認した。

②第2回研究会の成果

上記の第1回の研究会の成果を踏まえて、第2回の研究会では、各研究者からそれぞれの専門に基づい

たフィールドワークの課題・視点を共有した。

人類学・社会学的な立場から白石壮一郎は、20年間の継続的な調査を続けたウガンダ農村部での経験をもとに、もともと成人儀礼後にすぐ結婚をする社会が、高学歴化することによって結婚や就職までの間にモラトリアム期間が生じる変化が起きていることに注目する。その社会状況の変化に対して「将来」を留保しつつ農村や地方都市で年月を過ごす若者たちのあり方に関して、長期間にわたるつきあいで築いた親密な人間関係のなかでもたらされる対象理解のあり方を課題として取り上げることを報告した。

また近藤史は人類学的な立場から、タンザニア農村部の高齢女性の死をめぐって形見分けの儀礼のなかでみえる社会的な事情を取り上げ、ひとつの出来事に対する現地の社会関係や伝統儀礼に対する人々の態度について検討することを報告した。本テーマも長期の現地調査のプロセスから見える人類学的アプローチとしてのフィールドワークの課題である。

松井歩は人文地理学的な立場から、北海道寿都町でインタビュー調査・乗船調査・GPSロガーを用いた漁業活動調査、漁港に設置した風向風速計のデータという異なる手法で調査を行ってきたことを説明し、各手法により得られるデータの質の違いや相互補完性、相乗効果に触れて、地理学のフィールドワークのあり方について検討するとした。

新永悠人は言語学・日本語学的な立場から、人類学・民俗学的な意味での「言語」と異なる言語のフィールドワークのあり方について問題提起した。その上で、COVID-19感染拡大以降の方言学者の対応を取り上げ、仮説生成型（問題発見型）の方言研究においては自然談話の録音や書き起しのしやすさ、作業仮説の生成・検証を繰り返す面で現地での対面型の調査の優位性、さらには会話に触れる・慣れる時間の必要性について、奄美・久高の調査結果から検討するとした。

高島克史は経営学的な立場から、地域企業から出される課題を学生が中心になって調査し解決策を求めるビジネス戦略実習の講義を取り上げて、学生が社会の多様な人びと・企業と協業することによって解決策を作り上げていくプロセスに注目し、経営学におけるフィールドワークを論じるとした。

林彦櫻は高島と同様に経営学的な立場から、青森県信用保証協会との共同研究を通じてアンケート調査と、その回答結果を踏まえたインタビュー調査をしてきた経験をもとに、アンケート調査による統計的処理だけでは十分に把握できない事実があることを説明した。とくにワークライフバランスに関するアンケートでは起業者の多くが、満足度が高いものの、一般に言われるような仕事と私生活のバランスがよいからではなく、仕事と私生活が一体化した仕事観に関わっていることが明らかになった結果から、経営学的な研究課題におけるインタビュー調査の重要性について検討するとした。

佐々木あすかは美術史の立場から、作品を対象とした実物調査の必要性について報告した。作品調査においては質感や技法・構造、造形表現の特徴など、写真や図録だけではわからないことを調べる必要がある。とくに修理箇所の確認や表面の彩色、金箔などの状態、構造の確認においては実物資料の確認が欠かせず、さらにこうした作品調査を実現するためには所有者との関係構築が欠かせない。以上から佐々木は、美術作品を理解し評価することが、過去のモノを対象としながらも現在とのつながりをふまえて実施するフィールドワークであることを報告し、フィールドにおける理解の仕方について取り上げるとした。

諏訪淳一郎は学部生の調査実習引率で訪れた下北半島の佐井村矢越で出会った漁師の大漁祈願のための祭礼の調査を取り上げた。例年7月20日におこなわれるこの弁天祭において、弁財天にとっての聖域とされる桜島という無人の小島が祭礼の舞台となる。この祭りの空間としての小島を議論する論文執筆までのフィールドワークのプロセスを報告する。

上記に見てきたように、フィールドワークと一言で言い表したとしても、その経験は一様ではなく、課題も多岐にわたっていることを確認した。こうした問題に対して、多様なアプローチをとりつつ、対象理解のためのフィールドワークという経験の意味を深めていくことの重要性を確認することができた。

(2) 弘前大学資料館第31回企画展「ともにいること・ともに食べること—アフリカ・アジア・わたしたちの食」

本企画展は上記(1)の①で説明した博物館民俗学的視点で、フィールドワークを検討する試みとして企画したものである。人類学・民俗学の立場からの調査、および博物館学的な実践を交差させることで、フィールドワークに関する本プロジェクトの課題を本学の学生および市民と共有し、フィールドワークの必要性に関する問題喚起を行った。本企画では「ともにいること・ともに食べること」のタイトルの通り、食に焦点を当てた。展示を通して、教員や学生のフィールドワーカーたちが出会ったアフリカ・アジア・わたしたちの食の風景から、人と会い、ともに食べることを意味を改めて問い、人びとがともにいることについて、一定の共通理解を得ること、さらにはそれがフィールドワークという行為の要点であることを伝えることを目的とした。

本企画展ではまず、導入としてチンパンジーと人間の共食の違いについて取り上げ、チンパンジーの利他的な共食空間の形成に対して、人間が予め場を用意し、集まる人を想定した共食をすることを説明した。

その上で、アフリカ・アジアのフィールドワークのプロセスのなかで研究者たちが直面した共食の場面を取り上げた。アフリカでは、グローバル化する社会のなかで、伝統的な文化と植民地以降の文化が混交してできあがってきた共食の姿を取り上げた。またアジアでは教員が経験した雲南省でのフィールドワーク、そして研究者によるフィールドワークの結果から生じたインドでの研究者たちの結婚式を取り上げ、その共食の特徴を概観した。

アフリカ・アジアに対し、わたしたちの食で取り上げたのは、弘前大学の学生の食生活である。教養教育の地域プロジェクト演習「弘前の文化資源」の受講学生たちの協力を得て、学生たちに写真記録による食生活調査のフィールドワークを実施してもらい、その結果をともに分析したものを展示した。この調査の結果から家族から離れて新たな家族をもつまでの期間の「学生文化」ともいえる食の形があるのではないかと推定し、展示に反映した。複数回のデータのやり取りを通じた事例の検討は博物館民俗学的なアクション・リサーチの実践例ともなった。なお、わたしたちの食では民俗学・民俗誌実習Ⅰ・Ⅱの学生が野辺地町で行った調査のなかから食に関わる部分を展示に反映した。

こうした展示を踏まえて、改めて我々が対面して場をもつことの重要性を、集合するためのツールとしてのアフリカ・アジア・日本の茶器を取り上げて再確認するものとした。

(3) 今後の予定

上記の議論を踏まえて、2月中に2回の研究会を実施し、各分野におけるフィールドワークの特徴と課題を具体的に検討し、3月にそれらをまとめて、報告書として発行する予定である。

3 おわりに

本プロジェクトにおいて、多分野からのフィールドワークを取り上げたのは、人類学・民俗学、あるいは博物館学的な「経験」プロセスだけがフィールドワークではなく、各分野において多様な課題に直面していると考えたからである。研究会を通じて、研究活動においてフィールドワークというプロセスが重要であることが改めて確認されつつあり、またその活動の成果を展示という形で公開することができた。本プロジェクトの課題の最終目標は、フィールドワークという研究プロセスの必要性を論じる書籍の出版にある。本年度は課題の共有という意味では目的を達成することができたが、今後、書籍化に向けて継続的な検討を続けていきたい。



弘前大学資料館第31回企画展
 ともにいること。
 ともに食べること。

アフリカ
 アジア
 わたしたちの食



2022 12/16 fri. — 2023 3/16 thu.

10:00—16:00(日曜, 祝日, 年末年始(12月28日—1月4日), 1月14日休館)

会場 弘前大学資料館 入場無料

主催: 弘前大学資料館・弘前大学人文社会科学部

共催: 弘前大学人文社会科学部地域未来創生センター・
 日本アフリカ学会東北支部会・NPO アフリック・アフリカ

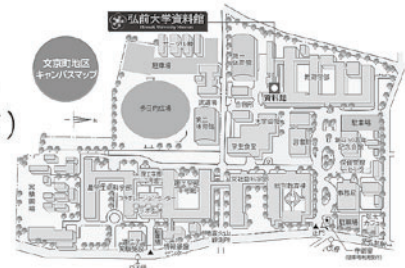
協力: 青森県立郷土館

座馬耕一郎(長野県看護大学)、金子守恵(京都大学)

令和4年度後期・教養教育「地域プロジェクト演習「弘前の文化資源」」受講生

令和4年度前期・後期「民俗学実習Ⅰ・Ⅱ、民俗誌実習Ⅰ・Ⅱ」受講生

問い合わせ 弘前大学資料館 ☎0172-39-3432



弘前大学資料館
 第31回企画展
 ホームページURL